

## 一、安政の地震による小松島の大火

嘉永七年（一八二六）〔同年は一月二七日に安政元年と改められた〕一月四日に発生した地震は、数カ月も続き、特に一月四日から一月五日の夜にかけて大地震があり、徳島城下と勝浦郡小松島浦村で大火事が発生し、県南の沿岸地方では津波の大被害を受けた。

そこで「世なおし」するという願いをこめて、一月二七日年号を改め「安政」としたが、翌、安政二年の半ば頃まで余震が続いた。

勝浦郡誌による記録は、小松島、田野、日開野等の住民は芝山（日峯山）、前山、天神山へ避難した。その当時、日開野の向井与吉は、か弱い子供であったので馬に乗せられ天神山へ赴いたが、小松島浦村は一面の火の海となって天神山まで照らして、白昼のようであった、と話している。

このときの小松島の状況を述べると、一月五日の夕刻大地震が揺り出すと同時に、川口には山のような津波が起り、大騒ぎとなり、命からがら各処に避難した。

このとき、北町光善寺の西隣にあった草家葺きの料理屋、小川家は一番に倒れて、炊事の焚火を伏せ込み、炎上して火元となった。しかし、誰一人として消火するものがない。とうとう光善寺に燃え移って堂宇を倒した。さらに火の粉は遙かに飛んで浜須賀（現在南小松島、松島町の一部）へ飛び渡った。それから新町は東の方から祇園神社宮司、武辻家まで焼け延びた。また西町は惣体、中町は地藏寺隣まで東方一体を烏有に帰した。北町はまた残らず灰燼と化した。

丈六寺の旧記によると神代橋と祇園、八幡の両社および地藏寺だけが残った。この記録は江戸年代史の下にも見られ、徳島、小松島の大火と併称し、いまなお古老の言い伝えに残っているが、津波は幸いにして少し上陸したのみであったという。

（中略）田浦、日開野方面のいい伝えによると、嘉永七年の一月三日より同月末まで始終西方の中天に大きな雷のような大音響を發して強震した。翌、四日の三時頃から五日にかけて、昼夜間断なく強弱交々震動して、五日には海嘯（津波）が来るといい出してから人心惘々、老若男女が避難した。そのとき中島方面では新居見の天神山に逃げていた。

また、家あっては夜は屋外に出て板や畳を持ち出し、寝起きた。江田村では川より西は西須賀の杉尾山、川より東は芝山（日峯山）に逃げていて家におる者は一人もなかった。

津波は、江田の橋まで上荷船を押し上げて来た位であったという。芝生もまた小松島その他と共に同地高所へ避難した。

大正一二年（七四歳）で当時のことを知っている新居見の庄野角蔵さんの話によると、同村の人々は村社、春日神社の裏手後方に当たっている東山下のおま石という所へ避難した。このとき同人が避難する少し前に、赤沢、上井両家の倉の大壁が一時に落ちたという。

当時、徳島市籠の住民は山上に避難した折、三日にわたる小松島の大火で余炎は大神子、籠まで照らして、磯辺の砂まで暗夜に見られたと記録されている。

昭和二九年小松島市に水道管創設のため、現在の南小松島町、松島町、堀川町の主要道路を掘り返した際、多数の焼瓦や焼土の層が見られ、当時米倉のあったと思われる松島町の山本裕康さん方付近では焼けた米等が発見されたことがある。

## 二、お亀千軒の地震と伝説

年代ははっきりしないが、正平一六年（三三〇）頃、小松島沖合いのお亀磯の地続きに「お亀千軒」と呼ばれる村があった。この島の氏神は蛭子の宮とあって靈驗あらたかな神様であったが、ある夜、信心深い氏子の枕辺に立って、「もし蛭子の獅子コマの目が赤くなったら大変な事が起こるから、早く島を逃げるが良い」と夢告げがあった。

その後、何年か立ち、町に悪党が来てこの言い伝えを知り、こっそり獅子コマの目を朱に塗った。翌朝、これを見付けた村人は大騒ぎをして、手回品を船に積み、命からがら一人も残らず村を去った（現在の中田町根井に避難したとも伝えられる）。

盗賊共は島の人がいなくなると、村中の沢山の品物をかき集め、舟に積んで「明日朝逃げ出そう」とその夜は飲み食

いをほしいままにして寝ていると、夜半、にわか大風が吹き起こり、大波が打ち寄せ、一晚のうちに島はあとかたもなく沈んでしまい、盗賊は波にさわられ、魚に吞まれて死んでしまったといわれる。

この出来事は偶然かも知れないが、島の沈下（陥没）と考えるのが至当であり、今なお現場へ干潮時に行くと、石鳥居の跡が海中に見られ、当時大地震があったと推察される。

昭和四〇年頃、徳島大学の学術研究班が潜水して調査したところによると、昔は人の住んでいたと思われる遺物が採集されたと聞いている。

### 三、お玉井利の伝説

高波に洗われた防波堤の復旧には、練築の石がきや、鉄筋工法がなかった昔は、人柱（人間の生き埋め）によるのが最も効果のあるものと信じられていた。

小松島横須のお玉井利改修は貞享年間（一六八〇〜一六八七）の出来事として、今なお横須町の市庁舎の北東の隅にお玉大明神として祭られている。

当時、台風期に小松島浦村と横須浦村をつなぐ街道筋の防波堤は、ひとたまりもなく崩れ、その後は塩害冠水による田野、芝生、日開野は田島の被害はもちろん、交通は絶え、そのたび



お玉大明神（昭和51年）

に自然に対する付近住民の復旧作業がたいへんなものであった。

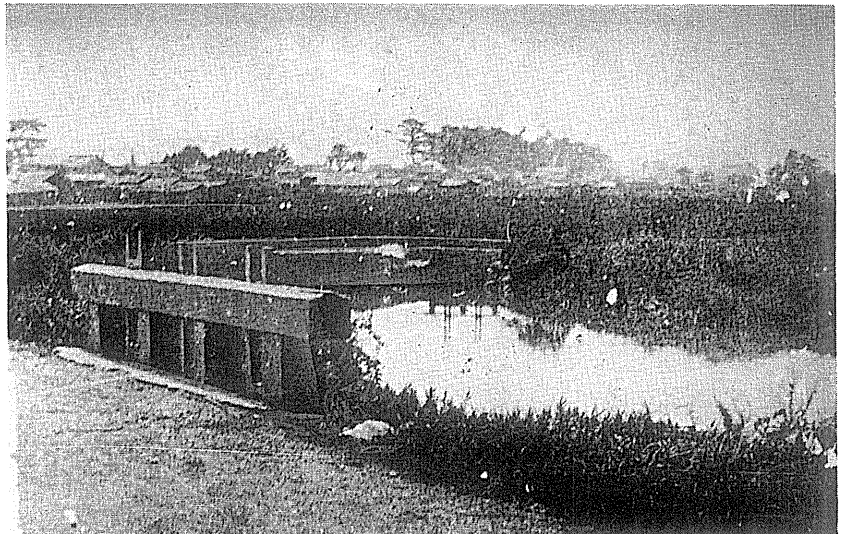
こうした事が繰り返されているうちに、人びとの考えは落着くところに来て、恐ろしい計画が集会の最中に、誰いうとなしに沈黙の中から起った。もちろん、後のたたりが恐ろしいので、先に立って人柱を定めるなどいう者はいなかった。

「これではいつまでたっても仕方がないので、可哀そうだが村人たちのため、明朝一番に通りがかった者を人柱にしよう」といった者があり、一同もやむなく賛成した。

この話を隣の室で耳にはさんだのが娘お玉で、横須小町とうたわれた美人であった。

「私が村の人達の難儀にかわろう。何にも知らぬ通りがかりの人を、生き埋めにするむごたらしい事は出来ない。もし、誰も通る人がなかったら、村人はいつまでも救われない」。お玉は悲しくも健気に思い立った。

翌朝、村人は手に手に道具をもって現場に集まった。星の明かりももうす暗く、人の顔の見わけもつかぬほど、そのとき、打ち寄せる波の彼方よりバタバタと土を踏むぞうりの音が聞こえた。「それ」と一同は黒い影におどりかかり、たちまち掘



於玉井利（大正のころ）

った穴に投げ込み「ナムアミダブツ……」と唱名しながら土を盛った。  
その日からお玉の姿は村から消えた。工事が完成してもお玉は帰らず、初めて人柱がお玉であったことを知った村人は、その霊を慰めるため、ほこらを建て、この井利の名も、お玉井利と呼んで、美しい娘の犠牲を胸に刻んだ。その後、お玉の霊はこの井利を護り、堤防は今日に至るまで切れたことはない。

#### 四、観音さんにまつわる火の用心の伝説（中津峯観音さんの由来）

今から約四〇〇年前、小松島浦向地に彦太夫という船頭があつて、常にこの地と大坂との間を航海して回漕を業としていた。

あるとき、海上風波荒く、連日の大時化で大坂にて風待ちをしていると、一人の僧侶が現われて「私を小松島浦まで便乗させて貰えるなら、きつこの風波はおさまるであろう」といった。

彦太夫は心よく僧侶を乗せ、波が高いので艀の船具入れの中に導き、出帆した。すると不思議にも風波はおさまり、無事に根井の浜についた。船頭が僧侶に着船を知らせようと、艀の蓋を取ると、僧侶の姿は見え、そこにさん然と輝やく如意輪観世音の尊像があつた。

さては、僧侶はみ仏の化身であつたのかと、あまりのことに驚いた。

彦太夫は、船子の庄九郎孫に命じ、元根井の横山義徳に手伝わせ、み仏を背負って上陸し浜に安置した。すると仏像が傾いたので、彦太夫は手ごろの平らな石を敷き、傾きをなおした（助石の由来）。

その後、この尊像は中田の豊林寺（現在の千代校の西にあつた）にお移したが、ある夜彦太夫の夢枕に僧侶が現われ「私の行きたいところは中津峯山の如意輪寺であるので、送って貰いたい。その報恩のためにはこの里は三軒以上焼けるような大火事は起こさせない」とのお告げがあつた。

彦太夫に、これを聞いた村人は直ちにこの夢告げに答え、総出で尊像を勝浦川まで送り、宮井の住民に引きつぎ中津峯山に安置した。その後、船頭は「助石屋」と名のつていた。その子孫は京都に住んでいるが、観音さん下山ご開帳の

際は必ず帰郷し、ご奉仕に参列していると聞く。その由来から、現在、中田町根井の海岸にある観音波寺には、海上安全、火の用心、悪病、災難除けの祈願に訪れる者も多く、地区住民の信仰は非常に深い。

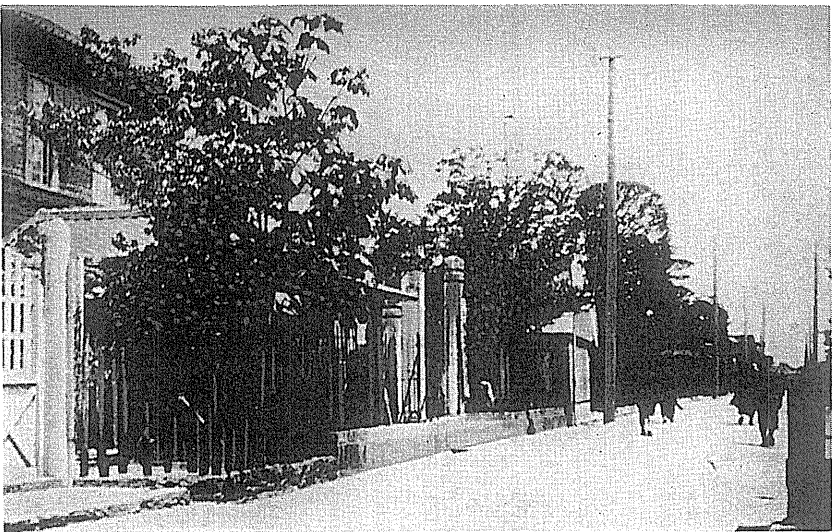
（注）現在まで北浜、元根井地区には、三軒以上焼けるような大火事は発生していない。

#### 五、勝浦川決壊による大洪水

「大正元年九月二一日、夜来の豪雨は（中略）勝浦川に絶大の洪水を見、県下大小河川の増水は著しく、下流氾濫大洪水と化し、人家の浸水、農作物の被害は絶大であつた。人畜の死傷また免れざるも、諸川の氾濫とともに交通機関は断絶し、ただ今のところ正確な調査は得難く、やむを得ざるころなり（下略）」（大正元年九月二五日付徳島日日新報による）とある。

このときの状況は、相当甚大な被害があつたと見え、小松島としての被害記録は不明であるが、古老の話によると、小松島一帯は湖海となり、金磯の多田邸付近に土砂が流れて埋まり、泥水を流すため、排水路を作つたほどであつたという。

明治、大正年間の台風、集中豪雨期には、たびたび勝浦川の決壊があり、火方組を始め農家の者が、水防活動に従事し、活躍をした。尊い人命が失われ、田島の荒廢で農家の収入がなく



明治末期の小松島町役場

なり、飢饉が続き、伝染病がまん延し、災禍の爪跡の大きかったことがうかがえる。

この時代の住民は毎年繰り返す風雨出水との徒労の戦いが続き、勝浦川氾濫という悲惨な宿命を背負っていたが、現代は再三の改修工事により、堤防護岸工事を完成、その憂いは解消した。

## 六、中郷村における大火

明治四三年三月の昼過ぎ現在の中郷町中央通の南東付近に大火災が発生、約二〇戸の家屋が焼失した。

当時発足したばかりの<sup>あがたぐみ</sup>県組の活躍は目ざましいものがあり、隣接民家への延焼を防ぐため、北側の家を破壊して火みちをつくり、被害を最少限に止めたとのことである。

その頃の家は、草屋葺きのものが多く、火の回りの早かったことが今でも語りつがれており、原因などについては記録が残っていないが、焼跡の悲惨な状況が推察される。

## 一、二条通り生必の大火

昭和二年二月一日午前二時〇分ごろ（現在の外開七番地一帯）小松島駅前より西（現在のなや旅館）の付近より出火し、二条通り一条通りにかけて大火となり、焼損家屋二五戸、罹災世帯数二五戸の大きな損害となり、同日午前四時ごろになり鎮火した。小松島における未曾有の大火事であった。

火元は、生活必需品配給組合（戦時中に物価統制令により生活必需品の配給業務をしていた）で出火の原因は火鉢の残火か、煙草の不始末と推定されたが、確定する物証はなかった。

終戦直後の物価統制令のころのことであり、当時の消防機具は、手曳きガソリンポンプが主で、燃料も配給制のため、火災発生中の現場でガソリン販売業者と消防が「ガソリンを出せ！」「配給キップが無いと出せない！」と大論争があったと語り草になっている。初期消火の失敗がこの火災を拡大した大きい要因であった。

当時、この付近一帯は小松島の目抜き通りのことでもあり、また敗戦直後の最も物資不足の折とがかさなり、小松島駅から眺めた焼け跡の状況は、目もあてられない悲惨なものであった。泣きながら焦土の中から焼け残りの衣類等を掘り出していた住民の姿は、今なお忘れることが出来ない。

この教訓は直ちに住民の生きた声となり、同年九月一日に小松島町常備消防部（消防署の前身）が設立され、有事即

応の消防体制が設立された。あれから二九年が過ぎ、現在では想像もつかぬ話となったが、敗戦直後の消防の素顔の姿であったといえよう。

### 三、昭和年代における大型台風

◎昭和九年九月二日 室戸台風の記録

同日午前五時一〇分室戸岬における最低気圧は九一一・九ミリバールを記録し空前の最低記録。県内での最大風速毎秒三六・七呎、高潮は小松島港で潮位最大偏差一・四呎であった。このとき小松島港に停泊中の機帆船が押し流され、千歳橋橋桁に衝突し一部を破損した。

勝浦郡における被害は次のとおりであった。

死 者	四名	負傷者	五名	全壊家屋	二九戸	半壊家屋	二六二戸
流失家屋	五戸	床上浸水	九七戸	床下浸水	八七五戸		

◎昭和二〇年九月七日 枕崎台風襲来

◎昭和二五年九月三日 ジェーン台風襲来

◎昭和三四年九月二六日 伊勢湾台風襲来

◎昭和三六年九月一六日 第二室戸台風の記録

当時は高潮により川北、川南地区の低地部に海水が氾濫し、床上、床下浸水が市内目抜通りの繁華街を含め、特に川北、北浜、中田、川南、横須の大部分に及び交通は杜絶し泥水の中に孤立の状態となった。

同日午前一時に市役所内に災害対策本部を設置し、救援活動を開始した。

気象観測記録によると、中心気圧九三三ミリバール、瞬間最大風速毎秒三八呎。

#### 市内の被害状況

全壊家屋	五戸	半壊家屋	二八戸	床上浸水	二、八〇〇戸	床下浸水	一、七二五戸
				(床上浸水の最高個所)	床上一・五呎		

死 者 なし 負傷者 一四名

この浸水状態は、九月二日まで後続小型台風などにより続き、九月二日災害救助法が発動され、横須賀より救援の海上自衛艦三隻が入港、救援物資が輸送され、自衛隊員と消防団員が協力し物資の荷上げ作業を行った。特に低地部の北浜、川北、中田地区にあっては九月一七、一八、一九の三日間、一部被災地は停電と泥水のため、炊事不能となり、市内小学校で炊飯し、消防団員により給食の配給作業が実施され、この台風により破壊された市内益エ門堀(通称エツケン堀)水門は排水不能となったため、二条通、三条通の低地帯は満潮、降雨時に床上、床下に浸水し、同年一月にいたる間に消防車による排水作業が、延一〇回昼夜を問わず出動し、消防の出動延人員は二五〇名、出動消防ポンプ車台数は延四〇台に及んだ。

◎昭和四〇年九月一六日・一七日 台風第二四号が襲来

最低気圧九五二・五弱、最大風速毎秒三五・八呎、瞬間最大風速六七呎を記録し、特に風による被害が甚大で、南小松島小学校の南校舎の倒壊や東出口の日昇館跡マーケットの倒壊があり、市内の大半が屋根瓦に大被害を受け、復旧工事が大変であった。

### 四、昭和二十七年以降の大きな火災

◎昭和二十七年一月一日二時三〇分出火 小松島市三条通り 東洋劇場(映画館)

望楼発見により出動、必死の消火により木造二階建一棟延二九七㎡を全焼したが隣家への延焼は防止。(東紡自衛消防隊も応援に駆け付け協力)、損害 二〇〇万円。

◎昭和二十八年二月九日一六時四五分出火 横須町一三七 住家六世帯一棟、延五二一・四㎡全半焼、損害 四七

一万円。

◎昭和二年八月二日一六時四五分出火 立江町田中山 煙火工場爆発、火傷により一名死亡。  
◎昭和三年一月一日一四時四〇分出火 田野町 煙火工場爆発、四名重傷。

◎昭和三年六月二〇日一六時四〇分出火 鳳栄町 住家三戸全焼。

◎昭和三年六月二〇日一三時三七分出火 東出口一三 三戸全焼。

◎昭和三年六月二〇日一八時三〇分出火 立江町赤石四九 木工場(家具製造)、一二世帯、延一、〇八四㎡を焼失。

損害 一、三六八万円の大火災で、全消防団出動、隣接町村よりも応援出動があった。

◎昭和三年六月二〇日一四時四〇分出火 大林町 煙火工場爆発、二名重傷。

◎昭和三年七月一〇日一五時四四分出火 大林町 煙火工場爆発、一名死亡。

◎昭和三年九月二四日五時一五分出火 新港四六 住家、倉庫五戸を全半焼。

◎昭和三年三月三日一時三〇分出火 県立小松島西高等学校 木造二階建校舎延八〇一・九㎡焼失。

損害 一、三五二万円。

◎昭和三年一月七日一三時四八分出火 大林町 煙火工場爆発、一名死亡。

◎昭和三年一月二四日〇時ごろ出火 田浦町中村、豚小屋及び居室。

北西の風により延焼、降雪のため消防活動は困難をきわめた。延二九三・七㎡全焼、損害 四〇〇万円。

◎昭和三年八月二八日一四時一五分出火 中田町中筋一二 製綿工場、延一二八・七㎡焼失、損害 四七〇万円。

◎昭和三年四月二二日一八時五二分出火 元根井 四国製油工場、四棟延五〇〇㎡全焼、損害 一、九〇〇万円。

貯蔵中の食油が燃焼し、黒煙天をこがした。停泊中の海上自衛隊駆潜艇かもめ隊員四〇名は可搬ポンプで応援出動した。

◎昭和四年二月一八日一三時二〇分出火 大林町 煙火工場爆発、死者四人、負傷八人。損害 四〇〇万円。

◎昭和四年一月一八日二時三五分頃出火 中ノ郷町桜馬場 醤油工場、七棟延六六九・九㎡焼失、三世帯罹災。

損害 一、七〇〇万円。

◎昭和四年九月五日一〇時二四分出火 芝田小学校給食室、校舎、付属建物を含み四七五㎡焼失、損害 二八〇万

円。

◎昭和四年二月二日一九時一九分出火 横須町 飲料水製造工場(不老閣焼失)、焼損棟数四、焼損延面積六七

九・八㎡。損害 一、〇六一万円。

◎昭和四年一月一四日一五時四五分出火 北大地二四 製綿工場、工場他一〇棟延六四三・五㎡焼失。

損害 一、〇六〇万円。

◎昭和四年一月一四日一六時九分出火 外開二八 店舗、住家延二八九㎡全半焼、罹災七世帯、損害 一、六〇

〇万円。

◎昭和四年五月一七日一九時二八分出火 西ノ口二三 店舗併用住宅(同日、一九時四四分鎮火するも一八日五時

四五分再び出火、延二一四・五㎡焼失。損害 一、五八四万円(特殊なケースである)。

◎昭和四年二月一五日二〇時出火 北浜一六一三 古物倉庫、延八〇〇㎡三世帯を焼き、損害 八〇〇万円。

◎昭和四年三月二四日七時五〇分出火 小松島中学校 木造校舎五七八㎡を焼失、損害 四二〇万円。

◎昭和四年三月二八日九時四五分出火 南小松島町一三 店舗併用住宅四世帯延一五八㎡を焼失、損害 一、〇

三八万円。

◎昭和四年六月三日一二時二三分出火 田野町宮ノ本五七 煙火工場爆発、死者一名、負傷四名。

◎昭和四年六月三日一六時一三分出火 赤石町一〇一三 木工所(金物販売)八棟類焼、延八二五・八㎡焼失損害

三、〇〇四万円。

◎昭和四年三月二日一四時〇五分 中田町東山遠見ヶ原付近の山林 約六〇〇町の山林に延焼し、一部は管

外徳島地区にも及び全消防団の必死の消火作業により、同日二時零分に鎮火。この間、延九時間の消火作業が

続けられ、付近住民ならびに一般市民から消防活動に対し深く感謝された。

◎昭和四年一月二八日〇時二五分出火 立江町若松の立江寺本堂の護摩堂付近 本堂を全焼、同日二時三〇分鎮

火。焼損面積延四二二㎡、損害は貴重な仏像などの焼損により三億二、九〇〇万円。

◎昭和四年一月二二日二時三〇分出火 中田町東山 徳島造船小島松工場 翌二月二日三時三七分同工場

六棟(延三、〇一〇㎡)を全焼し鎮火。死者一名。損害 五、五六三万円。